# 福島原発をゆく(1)

東日本大震災・福島第一原発事故から7年の歳月が流れた。今回ようやく、原発事故の現地を駆け足で回ることができた。数回に分けて「調査レポート」を綴りたい。

東京から常磐線で「いわき」まで行き、そこから調査、現地視察が始まる。「案内役」は放射線衛生学者の木村真三さん。原発事故以降、福島などで調査を継続的に行うとともに、チェルノブイリにも定期的に通う気鋭の研究者である。地道な調査にもとづく案内は、説得力に満ちたものだった。限られた時間のなかで、多くの情報を得ることができた。

バスは国道6号（陸前浜街道）を北に向かう。広野火力発電所を見ながら、サッカーのナショナルトレーニングセンター「J-ヴィレッジ」に立ち寄った。ここは原発事故対応の前線基地として使われた。グランドや施設も整備され、再スタートする。楢葉町を経て、富岡町に入り、廃炉が決定した福島第二原発に近い JR 富岡駅で小休止。写真でみた記憶があるが、震災による大津波で駅舎が流された。半年ほど前に開業した駅舎から、太平洋が間近に見えた。茨城から以北の太平洋岸は、津波の被害も甚大だ。

浜街道をさらに進むと、有名な夜ノ森桜並木に。ここは映像で何回も見たところだ。2.2キロの桜並木の大半は、いまも帰還困難区域だ。時間が止まったような景色を眺め、なんだか複雑な気持ちになる。バスは福島第一原発に近い大熊町、双葉町に入る。すべて帰還困難区域であり、駐車できないので、車窓から誰もいない街並みをじっと眺めるだけだ。

浪江町役場に立ち寄り、富岡街道に入って、福島市の方に向けて山道を走り抜ける。ここは原発事故のあと多くの車で大渋滞した。映像でも見たことがある浪江町津島地区あたりまで行った。

途中、震災で傾いたままの國玉神社前のモニタリングポストを見ると、線量は高い。案内役の木村さんの線量計の方が高い数値なことにも注目した。報道でも高い線量計が続いた赤宇木（あこうぎ）地区の北は飯舘村だ。木村さんが原生林のように広がる柳の群れに、原発事故前は何があったのかと問いかける。かつては田んぼが広がっていたと言うと、メンバーから驚きの声が上がる。想像もできないような、7年間の自然の変化だ。いわきから広野、楢葉、富岡、大熊、双葉、そして浪江の山間までの長い距離を、駆け足でめぐり、原発事故の影響をこの目で確かめることができた。

（2018年6月27日）